

鮎川哲也探偵小説選
目次

【第一部】

白の恐怖

3

【第二部】夜の演出

探偵絵物語

最後の接吻

退屈なエマ子

アドバルーン殺人事件

舞踏会の盗賊

出獄第一歩

処刑の広場

激闘の島

ヨットの野獣

無人艇タラント号

九時〇七分の恐怖

湖泥のギャング

エミの復讐

*

寒椿

黒い雌蕊

174 170

165

160

155

150

145

140

135

130

125

120

115

110

草が茂った頃に	183
殺し屋ジヨオ	184
青いネツカチーフ	194
お年玉を探しましょう	197
【第三部】海彦山彦 ^{うみひこやまひこ}	
海彦山彦	214
遺書	218
殺し屋の悲劇	222
ガーゼのハンカチ	226
酒場にて	230
【第四部】	
白樺荘事件	236
【第五部】	
地底の王国	364
恐龍を追って	370
「白樺荘事件」刊行にあたって（小池純代）	377
【編者解題】 日下三蔵	378

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

【第一部】

白の恐怖

プロローグ

鮎川君と私とは、東京のおなじ中学のおなじ教室でま
なんだ仲だから、かなり古いつきあいである。私が弁護
士を業としているのをいさいいいに、推理小説をかい
ていて法律的な解釈に疑問をもつと、すぐに電話をかけ
てよこす。べつにそれをどう云うつもりはないが、
そういう意味で、鮎川君は私にかなりの恩恵をうけて
いるはずであった。ところが彼は非常に勝気なたちの男
だから、いままでについてぞ有難そうな顔をしたことがな
い。恩寄せがましい気持は少しもないにしても、正直な
ことを云うと、鮎川のやつ、一度ぐらいは感謝してくれ
てもよさそうなものではないかと思わぬこともなかった
のである。それがひよんなことから、彼もやはり私の好

意を感じてくれている様子がわかって、ちよつとばかり
うれしく思った。

一カ月ほど前のことだが、鮎川君が突然に電話をかけ
てよこして、お前に印税をかせがしてやろうじゃないか
俺もだいぶ世話になつたからなあ、と云う。はじめのう
ち、どうも彼の喋ることがぴんとこなかつた。印税をか
せぐからには当然なにかを出版するわけだろうが、私
にはよその人のように器用に随筆をかける才能もないし、
ましてや小説をものする芸当などできるわけがないのだ。
私がそう云つてことわると、いや、佐々君に小説がかけ
ないことはわかかってるさ、俺が云うのはきみの日記だよ
と答えるのである。ますます驚いた。文士の日記ならば
筆も練れていることだろうし、なかには初めから人目に
ふれるのを念頭においてかいたものもあるそうだが、そ
れも文章がすぐれているから世間の人がよくんでくれるの
であつて、悪文きわまりない一介の民事弁護士の日記に
だれが興味をもつてくれるだろう。印税がどのくらい入
つてくるか知らないけれど、臨時収入のあることはあり
がたいとしても、日記をよまれることによつて私生活を
のぞかれ恥をかくことを考えれば、差引きマイナスにな
る勘定である。

私がそう云つてことわると、中学時代からの強情で強

引な性格は齡をとるにつれてますますはげしくなるとみえ、いつかな私の話をきこうとしない。俺が云うのはきみのつまらぬ私生活の綴り方ではなくて、白樺荘でおこったあの連続殺人事件に関係のある部分のことだ、あいつをぬきだして並べれば、十万部はかるく売れるぜと説得する。揚句の果は、どうだい、金が入ったらうまいビフテキをおごってくれないかななどと、さもししいことまで云うのである。考えてみれば、彼はクラス随一の喰いしん坊であつたつけ。

なるほど、白樺荘事件といわれてみると納得もいく。あの事件の際に私は終始現場にいて、連続殺人事件のピンからキリまでを日記につけておいた。思うにあの事件について新聞に発表された記事はどれも断片的でありすぎ、週刊誌にのせられたものはあまりに要約されていて呆気ない。事件の経過をただしく理解してもらうためには、私の日記をよんでもらうにこしたことはないようだ。そう思いなおして女房とひと晩ゆっくり話合った結果、最初は私以上に頑強に反対しつづけていた家内もしぶしぶ賛成してくれたため、これを公けにする決心がついたのである。

私はいま、事件の経過をただしく伝えたいという意味のことをのべたが、日記をそのまま発表するのはいささ

か説明不足の個所があつたりして具合がわるいので、多少手をいれて小説風にかきなおしてみた。当時かわされた会話をできるだけ正確に思いだして再録したのも、無味乾燥な悪文を多少でもおもしろく読んでもらいたいと考えたからである。とはいえ、原文にはあくまで忠実な態度をとつた。たとえば人名地名などは日記にしろされていることそのままである。さらにもう一つつけ加えておくと、とかく顔をだしたがる法律用語はすべて削りつつ、この面にくらい読者がみても頭がいたくならぬよう気をくばつた。むかし殿様に魚料理をさし上げるときは、たべやすいようにすべての骨をぬいて調理したのだそうである。読者は殿様みたいなものだから、骨ばつた法律用語や専門的な描写は全部はぶくようにというのが、鮎川君の忠告だつた。私はそれにも従つた。

いまこのまえがきを書くにあたってゲラ刷を一読したが、覚悟していたとはいうものの、その悪文にあらためておじ毛づいた。しかしダイスはすでに投げられたのである。私は目をつぶって、これを印刷会社へ送るほかはない。

七月十日 木曜日 晴

かなり暑い。カレンダーのヨット美人の色ざり写真を
みていると、今度の休日に海へいこうかなという気にな
る。だが、往復のあの混んだ電車のことを思ったとたん
に気がくじけて、家で昼寝をしていたほうがはるかに快
適であることに気づいた。いま急にバスコントロール
をやったところで、若者どもの数がへるわけでもないの
だから、電車の混雑を緩和するためには、やはり車輛の
数をふやさなくてはならぬという結論になる。それが
できぬ国鉄総裁ならば、われわれは彼を必要としない。
早々にくびを切るべきである。

夜の九時すぎに、ようやく丸茂君がかえってくる。暑
いさなかの汽車旅行はさぞつらかったろう。早速ひやし
ておいたビールをだし、労をねぎらった。呑みながら話
をきく。丸茂君は右手に扇子、左手にタオルをもち、そ
れを交互につかっ、あとから吹きだす汗をふいていた。
やせているくせに汗かきだ。
「軽井沢はすずしくてよかったですね、こちらへ
ついた瞬間にこの有様です。暑いですがね、東京は」

「そのかわりあそこは冬が寒いよ。いいことばかりは
ないさ」

と、私は云った。なにか合槌あいつちをうたなくては思いな
がら、気のきいた返事が思いうかばなかったのは、やは
り頭が暑さにやられていたせいかもしれない。それにし
ても、丸茂君がひどく機嫌がいいところをみると、軽井
沢出張がよい結果をもたらしたからにちがひなかった。
私ははやく報告をききたいと思ったが、一応は法律事務
所の所長ともなるとあまりががつしてはみつともない。
しいてさりげない様子でビールをのんだ。

一匹の蚊が羽音をたてて彼の顔の前をとびすぎようと
すると、いきなり扇子とタオルを机になげだして、ピシ
ヤリとたたきつぶした。丸茂君の掌はとても大きい。あ
る易者がそれを見て、巨万の富をつかみ一生を幸福にお
くる相だと予言した手だ。彼が掌をひろげてみると、つ
ぶれた蚊の腹から、あかい血がでていた。先程いねむり
をしていた私をさして、しこたま吸いとった血だ。私が
ちり紙をとってやると、丸茂君はよこれた手をふいて、
ふたたび扇子をつかいはじめた。扇風器は昨日故障をお
こして、修理にだしてあるのだ。

「で、高毛こうも礼れいさんの用件というのはどんなものだっ
た？」

コップを抱えこんでしまった。

「そんなに大きな家なのかい？」

「ええ、亡くなった一氏が在留邦人きつての億万長者だそうでした、ね、自家用飛行機を四台ももっていたほどですから、あの大きな白樺荘も、未亡人にとっては小屋みたいなものかもしれませんよ」

「そんなに大きな邸なのかね？」

「いや、あの山奥にしては大きすぎると云ったほうが適切かもしれません。いずれは先生にもいつていただくようになると思いますけど……」

丸茂君は私のことを先生とよぶ。しかしこれは弁護士志願の彼が事務所のわかい女の子の云うのを踏襲したにすぎない。同郷同学の後輩だが、ちょうどひとまわり齡がちがつているせいによく気があう。

「億万長者という、なにか財産の問題でもあるのか」

「凶星です」と彼は大きくうなずいてみせた。

「財産の一部を甥と姪にゆずりたいと云うのですよ」

「ふむ、金額はどのくらいだ？」

「まあ待つて下さいよ、順を追ってお話ししますから」
ひらいた書類を掌でぐいとしごいておいて、顔を上げた。東京の暑気になれてきたせい、か汗はひっこんでい

が、そのかわりに、ひたいは酔いがまわって真赤になっていた。

「一氏はかなり貧しい家庭に生れたらしいですね。貧乏人の子沢山というように、この人も姉と妹がひとり、弟がふたりの五人兄弟だったんです。メモをみて下さい」

丸茂君は書類からひきぬいた一枚の紙片を私のほうに向けてよこした。

高毛礼 つた

高毛礼 次郎

高毛礼 あき

高毛礼 三夫

「このつたという人が一氏の姉で、あとの三人は弟と妹ですが年齢順になっています」

「つたもあきも高毛礼の姓になっているが、独身なのかい？」

「いえない、これは一氏がアラスカへ渡航した頃のことなんです。その後全部が結婚して、それぞれ子供をもっています」

「ふむ」

「このなかで、姉のつたは戦争前に病死していますし、次郎は戦争直後奉天で発疹チフスのために死んでいきます」

「奉天？」

「ええ、長男がアラスカへ行ったのに対して、次男は満洲へわたって生活していたわけですね。次女のあきも戦争直後に死亡していますが、これは栄養失調が原因だったらしいという話です。最後の三夫は、戦争中深川で夫婦もろとも爆死しました」

「すると兄弟全部が死んでしまつて、生きているものはひとりもないことになるね？」

「ええ、五人兄弟のなかで一氏がいちばん長生きしたというわけです。そのかわり一氏は子供が生れなかつたが、あとの四人はどれも子供がいるんです。問題になるのはこの子供たち、一氏から云うと甥と姪なのですがね」

「ふむ」

「一氏もわかい頃は元気にまかせて事業にうちこんでいたものだから、心にゆとりもなかつたんでしようが、老年になってくると、ようやく肉身を恋うる気持がわいてきたとみえて、甥姪たちに財産をわけてやろうという気になったんです。結局、果さないうちに自分も死んで

しまつたわけですからね」

「なるほど」

「たか子未亡人も帰国してようやく日本の生活になじんできたし、気持もおちついてきた、このあたりで亡夫の遺志を実行にうつしたいと考えるようになったんです」

「その手続を依頼したいというわけか」

弁護士としてはこういう仕事がいちばんありがたいのである。大して頭をつかう必要もなく、しかも先程の丸茂君の話だと報酬もよかつたはずだ。

「甥姪たちの住所はわかっているのかい？」

「いいえ、全然。兄弟が生きている頃から滅多に手紙をよこしたためしのない連中なんだそうです。死んだとたんによつくり縁がきれてしまつて、甥姪のだれがどこにいるんだか、生きているのか死んでいるのか一切が不明だということです」

ちよつと面倒な仕事である。しかしそれは興信所にたのめばいい。

「われわれにも、こうした伯父さんが二、三人いてくれるといいねえ」

と私は笑つた。

「しかし丸茂君、甥と姪の名前ぐらいはわかっている

「んだろうか？」

「ええ、このメモをご覧になって下さい」

彼はもう一枚のメモをひきぬいて私に手渡した。丸茂君は頭脳明晰めいせきであるとともに雄弁家で、弁護士になる素質は十二分にもっているのだが、おしむらくは文字がすこぶる下手である。下手というよりも、幼稚園の児童の落書のように邪気のない字をかく。彼のために散々に泣かされたのは郵政省で、第二の被害者は私である。

私がメモをもつてしかめづらをしていると、丸茂君は説明の必要を感じたらしい。

「姉のつたが結婚した相手は川井源造という男です」

「その間に生れた女の子がもと子だね？」

「おかしいな、ぼくはもと子とかいたつもりですがね」

「ああ失敬、もと子だ、もと子だ」

「いやですよ先生、からかつちゃ」

からかつたわけではない。どう見たところでももと子としか読めない文字なのである。苦心のすえ、私のメモに清書したものは、つぎのとおりになった。

川井 源造

つた —— もと子

高毛礼 次郎

芳江 —— たつ江

吉田 丑之助

あき —— 参助
吾助

高毛礼 三夫

久子 —— 明

「甥三人に姪がふたりだな」

「ええ。一氏が亡くなったのが十二月二十三日だそう
で、未亡人は、その命日に甥たちを白樺荘にあつめて、
伯母甥の初対面をしたいと云っているんです。譲渡の手
続はそのあとでとってほしいそうです」

「十二月の二十三日か……。まだ五カ月あまりある。

それにしても丸茂君、ぼくはこれ等の五人の甥姪たちが、
高毛礼一氏の遺産をうけるにあたいする人物であるよう
祈るね。ねがわくは豚に真珠などということのないよう
にしたい」

「そりゃそうです。いかに甥姪がかわいいとはいって
も、成人した現在の状態をたしかめもせず財産をゆず
ることは、場合によると狂人に刃物をあたえるような、

とんだ結果にならないとも限りませんよ」

「そう。われわれの取越苦労におわつてもらいたいのさ。で、その金額はどのくらいなんだ？」

と、私は肝心の点をうながした。

「ええ、問題はそこなんです。少々奇抜なことがあるものですから、ぜひ先生にも検討してほしいと思つてゐるんです」

丸茂君は書類を二、三ページくると、近眼の目をおしつけるようにして数字をみつめた。

「……高毛札一氏の遺産は、動産不動産あわせて三億以上になるそうで、そのうちの二億五千を社会事業に寄付して、残余の分を未亡人や甥姪たちでわけることになつています」

「ふうむ、気がとおくなるような話だな。それだけの大金をあつさり寄付するなんて、どうも金満家の心理というやつはわれわれノーマルな人間には理解できないね」

「こまかく云うと、たか子夫人が一千万、篠崎ベルタに三百万、あとの五千万を甥と姪にくれてやるんです」

丸茂君は妙な女の名前を口にした。

「篠崎ベルタ？ なんだい、それは。混血児か」

「まだお話しませんでしたか」

「なにも聴いていないぜ」

「そうでしたかね？ たしか説明したと覚えていますか……」

と、彼は小首をかしげてみせた。酔うともの忘れをするたちなのだ。

「混血児じゃないんですが、二世です。いや、三世かな？ とにかくあちら生れの美人でして、脚のわるい未亡人の杖であり、家政婦であり女中であり、同時に年齢も一つちがいですからとても気があつた茶のみ友達であり、無二の親友であるという女性です」

「なるほど、どちらもアラスカ生れだから気が合うわけだな」

「そうじゃないんです。ふたりとも南米産ですよ。高毛札一氏がアメリカ見物にやってきたとき偶然にたか子未亡人もブラジルからアメリカを見物にきていて、おなじホテルで顔をあわせたのがそもそもなれ染めなんだそうです。ロマンスグレイをひと目みて、いっぺんで参っちゃつたらしいですな」

丸茂君は想像をたくましくした。この事務所がたか子未亡人と交渉をもつたのは今日がはじめてのことだから、私が彼女を知るはずもないが、先日よこした達筆の依頼状といい、亡夫の遺志にしたがつて多額の金をおしげも

なく甥姪にくれてやろうとする気前のいいことといい、たか子未亡人の人柄に好感をもたぬわけにはいかなかった。

私がそう云うと、丸茂君もすぐに同意して、口をきわめて未亡人を激賞した。いつも異性をこきおろしたがる同君がほめるというのは、異例のことである。

「ただですね、裸一貫からたきあげた人だけに、一氏はかなり頑固な面もあったらしいんです」

「例えば？」

「たとえばこの財産譲渡の付帯条件ですが、甥なり姪なりが結婚後死亡していたとしても、その配偶者だとか当人の子供などには一銭もいかないんです」

「ふむ」

「どこの馬の骨だかわからない配偶者、あるいは馬の骨との間に生れた子供にまで金をゆずる気持はないと云うんですな」

「なるほど、割りきった考え方だね。しかし仮に甥姪たちが早死して、その親たちが生きてた場合はどうするんだ？ 親たちと云っても、一氏の兄弟は全部死亡しているんだから、その配偶者のことだがね」

「つまり、例えば姉のつたが死に、娘のもと子が死亡して、つたの夫でありもと子の父親である川井源造ひと

りが生きていた場合のことですね？」

「そうだ」

「これもだめですよ。川井源造にしても、一氏からみればどこの牛の骨だかわかりません。一氏は甥姪のわさに希望を托しているんですよ。本人がまずしい家に生れて学校へいくこともできなかっただけに、自分がみたくことのできなかつた望みを甥姪たちになえてもらいたかつたんです。甥や姪に金をあたえて、彼等がのぞむ勉強をさせたり、好きな道へすすませてやりたいと考えていたのですよ」

「なるほど、馬の骨も牛の骨も失格というわけか」

「それに、老骨もね」

「すると、この場合もと子のうけとる分は未亡人のところにもどつていくんだな。源造先生がくやしがるね」

私がそう云うと、丸茂君はちよつと意味ありげな笑いをうかべて、じつと私の目をみつめながらしずかな口調で云った。私がどんな反応をみせるか、それを楽しみにしているような表情がうかがえた。

「くやしがるのは未亡人じゃありませんよ。彼女がくやしがるのは、五人の甥姪が全部死亡していた場合なんです」

「え、なんだって？」